

埋め墓 石原義剛

久しぶりに訪れた南伊勢町相賀（おうか）浦は静かだった。波荒い熊野灘に面した

純漁村で、集落の前は入り海なのに「大池」と呼ばれる。その前方に細い砂州が左右に伸びて荒波を防いでいるからだ。今は砂州上にコンクリートの高い防波堤が立つ。砂州の南側が切れて、船が出入りする水路になっている。

この細い砂州に相賀でナントバと呼ぶ、古くから死者を土葬した埋め墓がある。今も木の卒塔婆と家の名を彫った石柱が半々くらい立っている。墓地の入り口近くに「漁師□□家」と彫った20センチ角の石柱が立っていた。

どの墓も丸石や縁石を並べて区画らしくし、砂州の砂利地を10センチほど高くしてあるだけだ。死者を埋葬した後は詣らない村もあったが相賀の人はここも大事に祀ってきた。

もともと、線香と花と水を手向けて祈る詣り墓は、砂州の外れにある寺の本堂横にあって立派な石碑が並んでいる。

埋め墓と詣り墓のあるのを民俗学で「両墓制」と呼び、三重の海岸村に多くあった。

その日は、日曜日の午前中だったが老婆が一人、埋め墓の掃除をしていた。昭和30年には相賀に1456人いた住民もいまでは608人に減り、それもほとんどが老人だ。盛んだった漁村の面影はない。もう墓の守をする人の居ない家が多くお盆でさえ掃除されることがない。

土葬が火葬に代わってから、お骨を埋め墓へ入れず詣り墓へ直接入れるようになり、一軒また一軒と墓が移転していると云う。「わしのところもじきに引っ越すわ」老婆は以外に明るく云う。多くの漁村で子らが都会へ出て、家族のかたちが変わりつつある。